

詩集

泥靴



林田盛雄

悔恨

96

舌の上には妄執の苔が生

えてゐる

もう聴くまい、もう語る

まい

錆て冷たい私が過去の構

束を

明らかに

私は憎む 秋

の抒情詩を

ちぎれ雲に擲子の花に

泥靴に

私は沈黙を投げ付ける

踊り狂ふ朝風に 生母の
面容は濡れ

冬みえて

路傍の草に 葉を喰ふ蟲

よ

老ひゆく父に 私は憶ひ

泣く

穿ける泥靴に 積年の禱り

は破れ

今も今

私が懺悔はアケシヤのも

とに鼓動する

勞苦の幹に意志を接ぎ

性

97

鬱血は充ち 亂れ

瞳を睨り

私は寒の針をぐつとつめ

る

猫が素破らしい換聲をあ

げてゐます

月の光が

私の心に糸をひくやうで

す

さめざめと 草の葉が慄

いてゐます

ああ、蔭があつたり あ

かるかつたり

この指先の血が

生温い風の香ほりを感し

ます

さうでしやう

(今、確に神祕が囁いた

集詩

泥靴



雄盛田林

寒すぎる秋……8

心には何が……それは愛
私のお腹には何があるか
つて

葡萄を今食べたばかり
多分發酵し始めてゐるだ
らう

それとも

さつきの青ねぎが 鶏の
首にでも巻きついてゐる
でしやうか

冷嘲……104

この私の腕の力を試す時
節が来たやうです
夜です霧です闇です
外套だけでは寒すぎる秋
ではありませんか

ブルドッグの顔貌に
枯れかかつた樹の枝に
秋は乾いて澄んでゐます
菊の花は頸を伸ばして凋
んでしまひさうです
誰れも剪り手の無い庭の

隅の固固に

春の笑壺に無邪氣な嬰子
夏も
夏の腕白盛りを惱み抜い
て

二十五の私は、秋の蜃氣
樓にだまされ
あわい憧憬の彩色の底に
沈溺んでゐます

菊の花は凋みさうで

無精な眼眦をその上に研

ぎ

軽い吐息に簞ねながら
私は憂鬱でなりません

訂正 前回の詩「悔恨

」のうちで「寒の針」
とありしは憂ひの針で
す

詩集

泥靴



林田盛雄

哀愁

110

片眼を見開いたら
ギヤベデ 鐵の上に 鷗が一
羽止まつてゐた

僕が歩き出したら
鷗は歩いて 遁始めた
海が荒れると 鷗は孤獨に

沈思

108

何も思ひたくないのに
卓にもたれて居睡し乍ら
僕はキャンデーを頬張つ
た

ひよいと眼が醒めた時に
は
夕陽が横顔にきらめいて
掌の上に
キャンデーとヨダレが流
れ出てゐた

僕は顔を擧げて
窓外に小娘の歩くのをボ
ンヤリ見た
そして
そつと唇を拭いた

なつて陸に上ると言ふ
この秋空に陽の目はなく
いはれのない涙が
つぶれた眼のふちから流
れてた

馬の支配

105

人は機械のやうに動いた

そこは日暮の交叉點であつたから

電車から降りた一人の老婆が

乗り換えやうと思つて、走り乍ら一臺の電車に對つて、手を舉げて、制止を乞ふた

併し

電車はゴトンゴトン響音を烈しく軋らして行き過ぎ了つた

殘された老婆は、何か口籠り口籠り、馳せ來たる自動車に危く避けて歩道に遷り始めた

そのくろずんだ後姿を

私は電車の窓から見下した

乗客にもまれ乍ら瞳を瞑つて

私は憂鬱に明日の仕事について考へてゐたが、間もなく

私の腦裡にはぎつきの老婆の後姿がよみがえつてゐた

矛盾

根ら顔の大男の罪人が電車に乗り込んだ。

罪人は手錠に看守の腕に繋がれてゐる。

看守は黙然と罪人の横で肩を並べて腰を据ゐてゐる。

罪人は窓外の夏、蠱惑される。

罪人はいき／＼と乗客に雑談する。

罪人は客からもらった一本のタバコを暢々吸ひした。
看守は顔を顰めて罪人の動作を見守つてゐる。右手を腰の短銃で支ながら。

街の一角

林田盛雄

街路は郊外に連續り
住宅は都會の中軸高層ビルデ
ングに對つて平伏する
樹木は煤煙を着て蒼空に觸手
を支へ
草花は埃を被つてその日の陽
光に微風に親む
自動車 ラヂオ 犬 群集
街の總ゆる巖音は四月の朝に
氾濫する
情熱と理智で彩色する意志の
展望
かくて數々の人間が絶まなく
勞働し
狂奔し、牛棲し 死滅する
私は人間群の微細なる一細胞
働き喰ひ 感情を摩滅らし
聽ては崩壊する都會の一時
時の一生物
街の一角に靜寂を湛へる墓石
に過ぎない
その枯寂を私は眺見し得る今
ではないか。

黙

殺

喚き荒ぶ　その嵐のなかを
蝶は大樹の葉蔭に憩うて
伸したり縮めたり　己が觸覺
を舌舐つりして　楽しむでゐる
はては淡い春の物思ひ心で

老　工　夫

老工夫が油汗に眼を吊つて鶴嘴を振り上げる
ペイブメントは陽炎で蒸されてゐる
ハツシと打ち下す鶴嘴のてごたへは
老工夫の全身にハツシと響く
老工夫の吐く溜息は
道の真中で自動車にしかれやうごしかれまいと
赤い旗に護られた死だ。

墮胎の文

あなたが、名譽ある墮胎分割を施す氣なら。
それは、一個のアミーバの生活だ。

(二伸)

これは、

聖母マリア様の處女性の~~最も~~^{最も}適例として。

役者

いかなる演出家も女性の藝術を解しない。
カマキリの雌は唇にその藝術の飛躍を意識
する。
昂ぶった性交の淵で雄を喰ひ盡すが如く。

寂秋

頭腦の裡に病葉を燃やしてゐる僕よ、
午下がりの蜘蛛を見てゐる子供は大きくなた
あ。
(十九元、十)

水蜜桃

私は骨身に疲勞を感じる。
私は何も思つてはゐない。爲事着のまゝ、
裏庭の隅に腰を卸して。

宵灯の洩れる枝に、揺ぐ人はなく、
水蜜桃の熟し落ちる音を、ボトリレ落ちる
その響を 私は微風のなかで聴いた。

移民の横顔

母國の新聞を擴けてゐる夫
雑誌の服型に縫物をする妻

子供はソファのなかに睡つてゐる
春の宵！明るい電燈！温かい愛情

夫婦はボツタ／＼語り合ふ

故郷 噂 その日の子供の有様

一日の爲事

明日の心構へなく今日の感情を充

移民地の移民達はつゝましく生活する

街の白人 困舎の白人

總ゆる生活風景が親み難い異國情緒

をたたへて移民の周圍を馳せ廻る

勞働に勞働を積重ね

移民地の人々は期節を追ふ渡り鳥に似る

古風な影法師があかす眺めて

聴くは過去の影に未將の姿を投げ込むことだ

らう

色褪めた唇

耀やうきがある 蔭かげがある

疲つかれ軀みを投なげた湯槽ゆばねの男おとこに。

耀やうきがある 蔭かげがある

夕ゆふべの食卓しょくたくに その味覺あじわいに。

そてには耀やうも蔭かげもない

勞働ろうどうを求め歩く街まちの彷徨者しやうべい達たちに。

◎ 小鳥の速さ

主人の居ない裏庭はらぶばアゴの噂りが充ちてゐる。

娘は戀を囁かない。

男は瞳を空の虚ろに放つてゐる。

春の舗道は速にすびいぞ程歡迎する。

◎ 或る戀愛風景

庭のすみれは雨雲に容姿を亂して、

夕べの風にアタマをおのよかし乍ら

空を眺める窓の娘にお辭儀した

都會營養素

空間に交錯するビルディングの陰影は、食欲とその情熱のビタミンA。
高速度の機械とその擾音は、細胞を刺戟する末梢神経のビタミンB。
街道、電燈の虚飾は、血に飛躍する官覺のビタミンC。
蠢動、狂燥の群集は、腑臍に鼓動する靜脈

のビタミンD。

映畫、チヨコレート、窓飾、脚、等々は、第六感を煽情するビタミンE。

そして、

都會を支配する光と熱の動力は、紙幣の生活するビタミンABCDE。

墓石の亂舞

林田 盛雄

A

精神の健康を釣らむとするものは都會の狂人だ
彼等に星で化粧した曠野の額を覗かしめよ
冷濁した彼等の感情をネフテントワトの爪先で、インド、アラビア、アフリカの地熱を藏被せて淨めよ。

B

これは窓掛に觸れてゐる猥談です
冷たいものは冷たい
熱いものは熱い
冷たいものは熱く、熱いものは冷たくなる
美は魂を蔽つた神祕です。
だから、それがいかにもにくい言つても棺桶の中の爺さんの生殖器は笑わない

A+B

老婆は口籠る——

ラヂオが何か言つてゐるやないか。
ランボやろ。つらの皮の厚いのやろか。

なぜ、返事をしてあけんのや。
老人になることは、絶えず受話機を耳にして

しゃべつてゐる姿だ。

その顔貌を贖めるがよい。

花崗岩の墓石で重重しく壓せられ皺まれてゐるのを。

街の風

スクリーンでは、今、
一對の男女が愛慾の抱擁に陶酔してゐる。
映画はハチやうとして、観客はまねた。
俺、孤りで前列に斷髪老婆の後頭、瞋めた

老婆は、瞳をこすり鼻をかむじ立ち上ノム
僕は、風邪氣味の寂寥、老婆の後から音楽
と彩色燈の幽暗の外に探ね出した。
街の舗道では、僕の頭髪を嫩りに風が、星
から吹いて來た。

飛躍するもの

雨は號泣する。

嗤ひは堆積する。

女郎・紙幣・零時A・M。

街道の鏡に神經は光芒する。

皮膚に放射する感覺に游泳する人生。

官能を震動さす瞬間の具像。

合理的睡眠の發生狀態とその潜熱を肯定せよ。

赤色三角に飛散する乳色の奇蹟を信ずるならは。

落葉

溪水に浸してゐる西瓜はドンキーが食べた。
ベンチの上のブレッドはスコイルが嚼ちつた。

月夜の溪谷は清流を唄つて。
私は睡眠不足だ。私は亢奮する。

七月の自然は私の汚れた皮膚に接吻する。
ああ。今朝はコーヒーの中へ落葉跳。

文章 林田 盛雄

彼の女は、情熱と愛情の昂奮に刺戟されると
烈しく身をふるはして、彼の胸にしがみつ
く。噫！嬉しいと呟きながら。

彼の女は、自身の瞳がとろけるやうに愛情で
燃ゆるのを意識すると、きまつて！たまたま
可愛い！と言ひ乍ら、彼を抱いてその頬
を續けざまに接吻する。

前者の彼の女と彼れは愛人の關係であり
後者に於いては彼の女と彼は母子の情愛を觀
ることが出来る。

肉 派 手 衣 装

派手な衣装が春を迎へるのです
いや、春が派手な衣装を求めるのです

若樹は薄緑
老樹は濃緑

アケシヤの自負心は

黄色の性殖器を擴けてゐます

晴れた朝 霧深い夕べ

子供

皿を破壊していつまでも借しむる主婦。
凋んだ花弁。蠅の臺所襲撃。

子供は奇計を案出した。屋根の上で、巢立ちし雛鳥を掴めて。

子供の哄笑に炎暑を食べてケロリとしている

太股

多田一朗

太股のしろさに水したり。
緑色の海水着は砂を附け、肉はふくらむで
る。

俺は、はづかしいと思うた。
我が愁を傷み知り過ぎて。

かくもためらはず。
俺の心は女態に贖めるものか。

街の散歩

にらむではいや 街燈
のぞいてはいや 子宮洗滌器
だまつてゐてはいや 窓硝子
ふざけてはいや 群集の脚
皆疾走してしまふがいよ
チヨコレート 寶石、造花、
衣装。

煙草

林田盛雄

接吻して、子を生んで、白髪になつて、崩壊する。
文明が、紙の煙突からカフジョウを吐き出した。

文明が妄想する。肚に歴史の吸殻を蓄めて。

愚鈍

林田盛雄

動かぬ時計、造花が卓上へ錆てる。
書齋のセーフは朝から半開だ。

僕は、手クタイと靴下も穿かず、ブラジャー外出
する。

夜になると、
この家の床下からも大膽に、コホロギが性情
を喚發させてゐる。

扇風機

田舎街の淺瀬では、泳いでゐる人の風貌が鮮明だ

若夫人が、床屋で、斷髪と爪の愛情を磨いてゐる間、その子供は、識らぬ青年の嬌笑に刷染むてゐる。

鏡の中で、若夫人は、臆に青年の肌ざわりを試食する。

床屋は黙つてゐる。微温い扇風機の風だ。この淺瀬に浮いた愛慾風景を抹殺し乍ら。

◎ 夜の宿

ほろ自動車^{じどうしゃ}を車庫^{しゃこ}に入れた働き男^{はたらきおとこ}の煙^{けむり}りは下^{した}を向く。

空^{そら}は晝^{ひる}の疲れ^{つかれ}を殺^{ころ}して梅^{うめ}の小枝^{こえだ}に小鳥^{こどり}を飛ばした。

私は梅^{うめ}の小枝^{こえだ}の、小鳥^{こどり}の彼方^{かなた}に

娘^{むすめ}の歩く姿^{すがた}をちりり見た。

娘^{むすめ}は決して私^{わたし}をふり向かない。

私は夕飯^{ゆふめし}が食^たべたい。

五月の微風

私は働^{はたら}いてゐる最中^{さいちゆう}に寺院^{じいん}の

鐘^{かね}の響^{ひび}を聴^きいて苦笑^{くせう}した

死^しの床^{とこ}の病人^{びょうじん}や生活能力^{せいかつ能力}の失^{うしな}

せた老人^{らうじん}や

無邪^{むじゃ}氣^きな少年^{しょうねん}少女^{しょうじょ}たちが

變^{かは}な恰好^{かっこう}で祈^{いの}りを繰^くり返^{かへ}して

ゐるこころだらう

聽^きて私は微風^{びふう}が吹^ふいて來^きるの

を感じた

汗^{あせ}ばんだ襯衣^{しんい}の胸^{むね}を出來^でるだ

け擴^{ひろ}げて

「やあ涼^{すず}しいぞ」を叫^{こゑ}んで

私は微笑^{ほゑ}むだ

偽善者

林田 盛雄

瞳にみへぬ香り

その感じ その氣品なき花

我は造花の眞實を發見した

艶に 歡喜に

大輪の紅に輝けど

あゝ その生命なき

しかす しかす しかす

獄窓に抜け込まれたる

一本の凋みたる花に

我は造花の心をみた

偽善者よ

眼にみえぬ感じ

その香り その氣品なき

一本の柳

林田盛雄

曾ては猫でありました

爪を磨くとき

ごうしてなれなれしく親しめませう

或る日は野鼠でありました

餓ねなくとも

チーズの匂ひを慕はないふさがありませう

今は只

一本の春柳

激流は私の姿をのみふんで

ハイ

私はあたまを垂れ

己が心を見究めやうとしてゐます



短詩

山棲の人々

林田盛雄

天地と眞境に人が歩く
青と緑の山頂に人生がある
無限に擴がる天空の深淵から

光りは
風は

自然の囁聲は
原始の姿で絶え間なく押し寄せ訪づれる

△この青緑の温室の中で
夫婦とおさな子が語り合ひ笑ひ合ふ
爽快な人世の眞實を愛情が生育くむでゐる

△山頂からは
空が見える

山が見える
澄み輝く海の奥が見える
咽る塵の人界からは強暴者達の喧擾が洩れ聞ゆる

△この山頂では

總てのものに明日の希望が委され

沈黙を讃め稱へる露の一粒にも

定めなき明朝の祈りをたくへると言ふ

千古不變の姿で

草木の芽生へにさへ

△新生の讚美歌が口吟きまれてゐるやうだ

流れの響

窓の濁りを洗ひ

樹々の枯葉を拂ひ

雨は烈しい唸りで街路に渦を卷いて流れる

天が地上の愁色をあがなつて

大地の萬象に胚胎の憐慰を注ぐのだ

乾きし心を洗いしめる私の心に潤を允たすのせい

私は終日書齋に閉ち籠つて

この雨の音

光るあわれみの言葉を

じつと聴いてゐる

△ 雨は金屬性の音階を持つ

雨は女の聲を響かせる

雨の音聲は誰れか私を呼ぶような

私は變になる胸が高鳴する

私は何か口吟みたくなつた

月蝕の鋪道 林田 盛雄

片眼をつぶつて
片眼で語る

あなたに不安のない月蝕の鋪道
でも心臓が傾き過ぎてゐる

揃つた足音に
肩の男に

秋の一景

中秋、午過ぎ 労働者の都會住宅の裏。

裏戸の階段に汚れた靴一足乾してあら。

階段の右側にギヤベヂ鑑二つ並んでゐる。

右側の壁にガーデン用の仕事道具が亂雑に立て掛けてある。總てが古ぼけて汚い。

階段の中程に、私が立つて秋空を眺めてゐる。二間程離れた前方に寫眞機を持つて弟が、あちこち見渡してゐる。

弟「寫眞を撮つてあげやう。ステファに腰を卸さない兄さん。」

兄「さうを。一寸、チクタイや帽子をつけて來るから。」

弟「ノウ、ノウ。そんなもの……そのまゝ……そのまゝでいいや。」

兄「背景がだめ。汚いさるー。」

弟「何處でもいとぢやない。汚いと思ふのがいけないよ、兄さん。」

兄「さうねね。」

(十九十九)

雄論

森 百太郎

僕は林田君について餘り知らない。嚴密にいふと、彼と

は起居をともし人格性格の長短所を知り合つてゐる仲ではない。が彼は憂鬱な聲の持ち主で、従つて沈靜な顔貌の持主で、激しく人に喰つてかゝらぬ、そして人の言をよく容れる人の様に思へる。

巧妙な詩法で作られた彼の詩はどこかにニヒリステイックな煙幕を張つてゐる。それは詩の中に、出て行かう、進んで行かうといふ出發地も目的地も示さない所で言ひ得るのだが、小説などでは描寫の力は廣れてゐると思ふ。今までと違つて、こん後は彼氏の新生活によつて得るより深い人間苦によつて、作中の人物に眞理を語らす根底を把握するであらう。小説なんか、小説作法で出来るものではない自己が生活人であり、生活をつかんで、その舞臺上に自己がいかにアクトしてゐるかを客觀的に見得る人に出きることだから、文章の上手さで藝術は成れりとするのはあつ

てはならない。

食ふためには趣味を捨てざるを得ないといふのは在米の文士諸君のいふことだ。だが傍係的生活こそむしろ近代人の「生活」特徴となるべきではあるまいか、たゞ生物學的な社會學的な生活は第義的なもので、本分といへば言へるがそれは却つて「彼自身の生活」のないことを示すものだ。

詩でも何でも書くがいゝ。そして金にならうがなるまいが、勞働を修養の一方便とすると同時に、文筆修業を一つの法悦への媒介として行くべきだ。

女性といふもに暮す男性は、

獨身時代には知らなかつた自己を發見するものだ。林田氏も愛妻氏と金のため、病のために、そしてそれへの闘争を通じて女を、男を前より以て知つて行くことは確かだ。故に全然いま迄の藝術の類型を破つた發展をやるべきだと信ずる。

七才の娘

林田 盛雄

七歳の娘が皿を拭いてゐる、日曜の晝。
父が洗ふ皿 数々々、

七歳の娘は黙つて皿を拭いてゐる。

(娘) 背い丈は父の腰より低く、

皿は娘の顔より大きい)

皿を拭き了つたら、公園に連れてゆくから、
父 娘々慈しむだ。

病母は寝臺の裡で南窓に照る秋陽の親み
玩具遊びにペーラを狭くしてゐるのは、

五つと四つの兄弟。

私は昵々贖めた。娘の表情を。

やがて年頃となり、人妻となる、その日の
娘を。私は想ふた。

一枚、一枚 皿を拭き卓上に置く娘の姿を、
私は寂しむ。私は願笑むだ。

半分だけ

子供は三輪車から轉落した
子供は脚首の傷口を壓へなが
ら、倒れた三輪車に、鋪道に
泣き事を羅列した。

こんな子供を、私、憐れむ
そして私は、子供の不注意を
たしなむる。

私は一人の友を識りてゐる
労働生活の慘苦を、疲勞を、
低價な賃金で不遇を恨む彼を

この友を。私は憐れむ。

そして私は、友の無能な責め
る。

だが、友は社會が皆んな
悪いんだ。と主張する
だから、友の主張は半分だけ
正しい。

早春

ふうふ おぢさんのやうに大きくなるよ

アブルは欲しくないのよ

さうよ 本當に おかしいでしやう

ねね? も一度言つて御覽
ほう パバが大きな聲でママを吐るつて

みいちゃんはいゝ兒だね

なあに

なあに おしつこ

おしつこがしたいつて

ホンのチヨイと カーテンの裾を撮み上げた

ああああ
足が坂を登つて行く

あれから上は霧だ
さうして 桑港にはかうも坂が多いんだらう

女人よ 御免なさい

餘り寂しいので

つい覗見がしたかつたのです

妹

僕は妹を持つてゐる。離婚した母の許に。

年齒十七

頭腦明徹

色慾不明

彼女は、大した別嬪ではないらしい。噂に據

れば。

僕は想つてゐる。

妹は人知れず憶つてゐるだらう。

——顔を識らぬ兄は、アメリカで一體何をして生活してゐるだらうかと。

僕は屢々凝視する、白晝の蒼空を。
だが、蒼空には何も見わはしない。

溪谷の處女

夜明け前の小鳥。

陰影を把たぬ樹木。

岩壁を撫でる溪谷の精氣に僕は、
處女を感じる。

處女の接觸に、僕は惑溺する。

僕は心臓を献げる、
清流に倒映する僕に。

神經を、臟腑を、表情の怯懦を反芻せ、
祝儀を僕は受納する。

處女だ。溪谷の、靜寂の、情熱の沸騰、
僕は心証する。

呼吸を透して投影する僕の開放を。

落葉

106

秋晴れの裡に黙して

僕は秋風に散る落葉をみる

悔恨とも懺悔ともなる落葉を

僕は心の奥に感ずる

それは

歩き疲れたもののみがみる落葉ではない

これからの人

その前途に散る

然な

落葉である

群集の騒音に獨り泳ぐ時

田野の静寂に獨り想ふ時

電燈の明るい食卓に我が

影の動かぬ時

心に積り積る落葉を深く

感ずる

小鳥は籠の内裡で美聲を

張り上げる

そこには何の矛じゆんも

ない

金魚は硝子箱の内裡で浮

いて泳ぎ廻る

そこには何の矛じゆんも

ない

二十日鼠は金編の箱の内

裡でグルグル馳せ廻る

そこには何の矛じゆんも

ない

勞働と生活苦に縛られて

僕は思索し 昂奮し 努

力する

そこには何も矛じゆんも

ない

けれど

僕は心に積り重なる落葉

を感ずる

枯

寂

林田 盛雄

僕は子供を熱愛する。

子供はミルクが好き。

子供はミルクの匂ひがする。

子供は僕をオヂさんと言ふ。

僕はオヂさんを肯定する。

僕のおぢさんは昔ー子供
だつた。

寂しい眞實

林田盛雄

日曜日の午後
金が五円ある

女郎を買ひ

支那飯を食べ

活動を観やうと思つたが

女郎を買つた経験がないので

良心にひきく咎められた

宿に歸つて静かに讀書してゐ

た

母が急になつかしくなつた

淋しいけれど健康で眞面目に

働いてゐるから御安心下さ

い。手紙を書いた

私はこゝろより眠りい誘はれ

た。

落陽のなかで

林田盛雄

道路修繕に専心する工夫等の鶴嘴の響がやむだ
かうして其日其日を、送迎する工夫等の生活を
私は考へてみた。

子供の遊び戯るゝ聲々が街を充たしてゐる。
これ等無邪氣なる子供の生長を。
私は想ふてみた。

そこそこ、主婦達が買物袋を提げ、舗道を急ぎ通る。

これ等主婦の家庭の有様を。
私は胸に描いてみた。

雀がアカシヤの枝にもつれ囀る。
雀の羽叩きに散るアカシヤの病葉を。

私は書齋の窓から眺めた。

秋陽に黄昏るこの窓に
のろい進歩のなかに正座する私自身を、
私に顧みた。

總ては去年の今日だ。
 私は何を意志しやう、
 人生をためらひ、怖れる私自身を、
 克服する私のあることを、
 窓の落陽に照らし眺める。

詩

大道の踊り子

林田盛雄

七つにはなるまい
スペイン娘の大道の踊り子を
労働者達が圍んで眺めてゐる
十年後のあの踊り子
十年後のあの労働者達
私は街路の真中に建つてゐる
十字架の許で
永いみそ苦笑してゐた

僕の顔

僕の顔はね
眉が薄く、眼が細く、鼻が低
く、口がへ字で、頬骨が突
がつて
輪廓は瘦せて、細長いさ
或る男がひやかしたよ
でも心はゴク優しいのだら
う一つて

阿呆ー僕は言ふ
ー俺は筋肉労働者だ
だから、働くみを識つてゐ
奴には
ゴク優しい一つて

監獄のなかで

林田 盛雄

明け、暮れ、闇。

窓が一つ、一日を繰返す。

窓は鐵柵の隙ひに著て、

陰は囚人の顔に響めさす。

窓の碧空に、私は慈母の唇を感ずる。

壁の換氣孔に、私は父の顔を憶ふ。

便器のなかの汚水、惡臭、痰壺、

糞の吸殻、人込、

囚人の擾音が鐵板の響きで――。

争つてゐる。泣いてゐる。唄つてゐる。

喚いてゐる。踊つてゐる。

深夜。

空氣の混濁は私に、水、嚴寒を覺さす。

監獄は餘りせますぎる。

なぜ鐵板でつくられるのか。

天井、床、壁、寢臺は。

天井が低い。頭が壊れさうだ。

監獄は一つの社會だ。

紙幣が時折小聲で散歩する。

紙幣はいつも看守のポケットから

タバコ。マツチ。ブタニクを祕密に囚人の一

人に運んで来る。

窓。紙幣。煙草。がなかつたら、

監獄とは納骨堂のことだらう。

(一九三〇。一、十九)

或る移民夫妻

おやぢはガーデナですよ

いつも脳神経衰弱を患つてゐて

朝晩 天理教のおつとめを缺かさぬさうです

細君ですか

しよつちうバヂヤマや派手な衣裳に

厚化粧の口紅で歩いてます

終日 ビヤノを弾いたり 戀愛小説でも

讀み耽つてゐるんでしようか

妾の信仰はココよ——と自身の乳房の

ふくらみを指して微笑むんです

ハイ、小娘が一人ゐるんです

アメリカ式に跳ね廻つてます

だつて、こゝは移民地ぢやありませんか。

羅府 林田盛雄

街道の真中に立つてゐる逡巡のやうに
花屋の前の廣告板のやうに
頭腦は心臓の邪魔だつた。
戀は時の借り衣裳だ
食卓に林檎が熟れて水仙を植えて
僕の感情は古ぼけた。

下水の響に生きる

林田 盛雄

天井に壁に、水洩れのシミある家に僕は棲むだ。

父の十年前の借家がさうであつた。

二階に住むてゐる人達の、便所の水響に、僕は深夜の寢返りを續け悩むだ。

修繕すれば。

水洩れは防げよう。シミは無くならう。

併し、永い間に腐蝕された、

僕の情熱、僕の意志、僕の青春は

新鮮な日の僕に還元出づやうか。

僕は同顧の不快を嘆いてゐるのではない。
いつ迄も、次から次ぎへ僕と同様に

水洩れをする。シミのある借家を
轉々して貧困にもだへる幾多の僕がありはせ
ぬか。
僕はそれを憶つてゐるのだ。

生物の感想

林田 盛雄

時計はねちをかける三僕を叩
き起すために復た動き出す。
だが機械だ。

花は春に迎へられて去年の種

から復た生育する
だが自然の意志だ。

僕は一日働いて一日だけ食ふ
だが不愉快な感情だ

食ふだけだつたら
過去も将来もない。
黒い羽色の鴉と同じでないか

春眠

林田盛雄

私は生活を彩る一つのうねりをも持たない。

労働が、趣味が健康が、宵の灯りが單々過ぎるのみ

私はものを凝視する習慣を覺わた。

和かに、寂しく、黙つて身に迫る象に瞑目しつゝ。

巢立ちした一匹の雀が木の枝で憩つてゐるまきに、烈しい雨

嵐が襲ひ、雀は街路に敲きつぶされた。

私はその死骸を掌にさつて纖い溜息を洩らした。

私の生活、私の性格は燃ゆる人生の良に對つて神聖な熱情を

確信を要求する。

併もなほ、私は微笑だこもなく

この塵芥に晒される自分をしらしら眺めるのだ。

戀のカタカナ

外 二 篇

林 田 盛 雄

芽生へては枯れ。
芽生へては枯れ。
芽生へては枯れる僕の三度目の愛情が。

窓硝子の曇りに氣紛れな片假名を書き綴る。
カゼハナクトモキノハワオチル。

コトリガナイデキマス。
キノウモアメケフモアメ。

仙水の香り

愛情の瞳をつむつてゐる人生のスクリーンに尙も執拗に踊り狂ふ容姿、
惱めば憐む程、

眠り

水仙の香りする彼女の髪が、意識に戻り、夢に湧き、胸のネクタイにからみつく。

壁に裂け目が覗いてゐる。
卓子の前に僕は寢間着で立つてゐる。

僕と壁の境ひの白い寢室。
雨だれが窓硝子をたたく。
この場面を何と譯しやう。

孤獨なる眠り。
否、絶対に否。
裸になれ、馬鹿。
飛び込め。

その日の心

オレンヂ賣りの鈴聲が街をつ
らぬき

紙屑買ひのドラ聲が裏庭を覗
いて

風をあやつる少年がゐる

アケシヤが花粉をばらまいて
カーテンの翻へる窓も

憶ひ出る乙女もゐる

私は昨日通つた仕事道を
煙草もやめ

酒も

悲しむもやめ

空のポケットで
宇宙の感情で

何を想ひわづらふ要があらう

色んなた廣告板に心を投げて
ゆく

或る乙女の

思ひで

「唄つてよ、何か？」と私は乙女に囁きました。

乙女はビヤノの前で、私を右に腰掛けさせて氣輕くアルトで歌ひ初めました。

「キス、ミ、スイトハート」。

一節終らぬその刹那に、私共の横に立つてゐた小女が、大聲を喚びて飛び跳しました。

この騒ぎの爆發を、小女の父が二階から怒鳴り付けました。

乙女は、私に徳苦笑を洩らし、靜かに二階の寢室に遁れ去りました。

間もなく、二階から降りて來た主人は、小女を見据へて、吐賣しました。

「坊やが、睡るまで靜かにしておいで」

私は、ホット吐息をついて、天井をにらまいた。

今頃、あの乙女は、誰の愛人になつてゐるだらうか、夢見心地に思ひ出す。

□ □
その日の眼 □ □

林田 盛雄

やもりは枯木のいたときで空
を見上げてゐる

空は碧くすんでゐる
やもりは黙つて木にしがみつ

いてゐる

何で私がこのやもりを

おどろかしたり

たなき落としたり

殺したりしやう

しはらば

人が弄んではなぶり殺すの

を見たではないか

屋上の感情

林田盛雄

屋上の國旗とアンテナ
何たる不安ぞ
室内は女郎の裝飾である

血

胸と秘密と青春を
燃しながら泪で肉體をとかす
蠟燭か

いや いや
僕よ

バット輝き、バット消ゆる時
代の電燈であれ
心暗ければ
バット碎けてこなごなにちれ

ブルドッグ

ブルドッグがあるいてくる
あの男はどうしてゐるだらう
檻の獅子に少便をかけられて
顔をしかめたあの男よ。

新理智派

林田盛雄

黄の灰燼がソファにこぼれ落ちたので、
夫は新妻に微笑を贈った。

あの娘は、すこしたりないので可愛いんです

ふいに、目の前の舗道に煙草の灯が飛んだ。
自動車は並木の幽暗い陰に停められて、
閉ぢられて、セイドが垂れて、
霧は街を這つてゐる。

あの娘は母親に似てゐる。

僕の愛情はめんくらつたんだ。
娘の母が厚化粧してほゝゑむたので。

菊——化粧したら秋だつた。

僕——蒼白い戀を振り捨てたいんだが。

二十日鼠——花も、春もない。

もう一息だ。——小車を廻しとけ。

女のつつましい姿

林田盛雄

私は悲しいのか

×

四月の暮烟に照り映へる夕陽

がメキシカンの大漢たちにまぢり

つつましくいちご摘む日本婦

人の姿を惹く染め抜く

成績のよい畑はみんな日本人

百姓のものだ
うんともうけて下さい、と私
は心で呟く

パンツで脚を包み、鐙の廣い
麥藥で頬を隠し、腰を曲げて
暮烟でいちご摘む女人
まへうしろを二三人の子供が
取り圍んで
あれは日本婦人だ！とひとめ
で領ける

×

加州の農園に働く女は日本婦
人ばかり

移民地に嫁いで来て、あんな
に働いて

日本人は毛虫みたいに嫌はれ

馬にも勝り働くのだ
私は嬉しいのか

アラ スカ 便り

アラスカボーイの生活は不愉快

快です

異人種の幾百人の男達が

賭博、猥談、雑魚寝をして

氷山を縫ふ船腹で春を忘れてゐます

×

北海にのぞむアラスカの荒原

は 永い冬眠からさめ

沼があり

狐がすみ

土人がゐます

×

性の叫喚にあらくれたイタリ

ヤンやメキシカンの魚夫が、

陸にきたらコビトのフィリッ

ピン共をからかひます

×

労働と睡眠の境が、薄ぼんや

りしたその日の太陽に似て、

ボンヤリしてゐます

ひまな時には

混浴で睡いだり

野花を眺めに散歩したり

土人の家に大ぜい押かけて

犬をつからしてなさげなくは
しやいでゐます

その日の案山子

のは痛快だ
鯊が岩を横に削ひ通つてゐる
新しい棲穴を捜してゐるんだらう

飛び魚が海面を跳るのは痛快だ

はちきれん力を踊らしてゐるんだらう

農夫が獨り崖の上で海を瞰下してゐる

百姓は喰ふに困る不景氣を世に訴へてゐるが
貧乏と勞働生活に疲れた體になにもかも投げ忘れて
あゝも案山子みたいになれるものか

夫人の感情

林田盛雄

私は、ベビ、ボイスが大變好きです。

ある宅で、ラヂオで子供の唄に耳を傾けてゐました。

その時、この家の夫人が、果物をのせた盆を持つて兩眼をうるませて臺所から出て來られました。

不審に衝たれて、私が、夫人の表情をうかがつた瞬間

「どうぞ、すみませんが、その子供の唄を何か外のに變へて下さいませんか？」と夫人は和やかに訊ねられました。

私は、刹那に心を衝たれた。

「夫人は、永い結婚生活に子供が生れないんだ」

夫人は、寂しく微笑まれた。

私は、胸に深い溜息を洩らした。

「女のお腹から子供が生れないなんて、何と言ふ悲しいことだらう」

小女は、兩掌の指を、私共の眼の前に突き出して、笑ひ騒ぐんでした。

あ
い
さ
つ

外二篇

林田盛雄

お母さん

御達者でいらつしやいますか
私も無事で働いてゐます

御安心下さい

僕の十年前の手紙だ

○

達者で働いてゐますから

御母さん

御安心下さい

昨年一昨年

今日もまた便りする

○

變らぬ姿で

しごと、夕食の卓に

にぶい眼をしばたたく僕に

お達者ですか

と人々は挨拶する

何が幸福か？

彼は若く、健康で、朗らかな
共産黨員です
今、失業して、ボーデングに
ゐます
貧しい人々の味方として
いつも街頭デモに勇敢です
彼は二弗程私にムシンする時
微笑するんです
「好い娘があるんだが、俺
が、「赤」だから」

今日の感情

刀はものすごい
やきばのにはひに濡れる夜が
ある

□
女人の眼をみるのはこわい

その瞳には睡眠が宿んでゐる
あてのない今日の感情は流る
るままだ

働いて
ただ働いて
そこに夕暮がある

旅

林田 盛雄

羅府より桑港への車窓を
加川文一君と語りながら――

「娘の一人旅」そう言ひ乍ら文一は娘の顔をじつとみつむる
そのカンランの畑中に女は日本人よ文一我に頬笑かける
トランプのあはれ姿も見えずなり後へ後へミレールの光る
萎びたる日輪草に風はなく群牛の空にトンビが一匹
煙つゝ大樹の踊る森を抜け蒼海のほとり響音烈しく
丘岩砂サボテンの熱風に無聊をかこち我が汽車のゆく
新聞をもらひて工夫手を擧げぬたにのたにゆゑ隧道を出て
大岩の窓の眞上に差し出しがもしや汽車の旅を憂ふる
動搖の食堂車の窓の荒れ野なり我が同胞の移り住まねば
椅子により幼子は立ちつ揺り轉び見知らぬ人ぞ笑ひ興めく

曾て加川文一君が灰色の花、浮雲
枯草等に寂感を詠ひしを憶ひて

人跡も小鳥も見えず砂丘は文一の唄ひし灰色の花
陽に映へて陽よりもあかき夕雲の山の彼方を我れは見上ぐる
文一の唄ひし秋の枯れ野原霧に日暮れて灯一つ見えず

詩

「少年を連れて」

林 田 盛 雄



少年を連れて私は動物園をたづねた。曾ては抱いてオシッコさした嬰兒が、今は、檻の虎に、獅子に、豹に、眼を瞪り恐怖と好奇と

冒險心に情熱をそそられ乍私の掌をしつかと握りしめる。少年には、猛獸の一擧一動が興味の繋がりなのだ

△

私共が數匹の猿の前に立つた時、少年が大聲を放つた『ヤアー赤いチンチンを出してらあ。お猿さんが——』その聲でひどく狼狽した私は、少年の腕をぐんぐんひつ張つて、猿の前から逃れ

△ 私 は、芝草の上を歩き／＼一寸、少年の顔を顧みた。少年は朗かな表情を路傍の鶴に向けて、何もなかつたかのやうに、呑気に、私の後からついて來た。

詩

生活の影

林田 盛雄



儚ない望みを希ひながら。

A

誰か？しのび来るもの
垣を飛び越へるらしい猫の
聲——誰も来ない
貴女はなにを夢みる
目頭に涙
噂よ、軒風よ、今宵もまま
ならぬ生活にまかして
——ああ、私は、彼女の傍に
そつともぐり込む

B

彼女は、不老千年と書いて
ある茶壺を買つて来た。
——これ三十五仙よ。
屋根裏の一室に、寢臺あり
机あり、ストウブあり、洗
面器あり。
失業者の窓にも微風が吹く
崩れ墮ちた幸運の橋を男女
二人相抱きて渡らうといふ
いつか。我々の生活に、
いつか。華がさくらだらう。

困窮する神様

林田 盛雄

「病氣する人は心が汚ないからです」

「生れながらの不具者はどうなるんだ」

「前世が悪いです」

さう言つて大宗教のおばさんはお祈りします。

× ×

「僕は健康だが、すばらしく貧乏だ」

「お祈りが足りないんです」

「だつたら、十分程、大聲でお祈して、レコードで朝晩か

けたらどうだらう」

するとおばさんは、

「勿体ない、もつたいない」とお祈ります。

× ×
あゝ迄も、神様はおばさんにお祈りさせなされる

一九三二年十一月六日發表
ナルモノ

林田盛雄

蛇

みにくい殻かを脱ぬぎすて
新しい自己じこを發見はっけんしやうと
ハダカになる彼の女かのむすめ

×

×

春はるから春はるへ

男おとこから男おとこへと這はつてゆく
やがて又また、古ふるいからを脱ぬぎす
てるだろ
新しい自己じこをみいだすた
めに。

詩

或る死刑囚

林田 盛雄

戀に狂ふ男仇し女の小娘を惨殺した。

仇し女は終身刑に處せられ、

男は死刑を宣告された。

社會は曰ふ——罪は死なり。

獄をたづねる人達が慰めた。

諦めなさい！悔い改めなさい

誨教師がすゝめた。

この世の罪を忘れて、來世の光明を願ひなさい。

死刑囚ははつきり言ひ切つた。

「私が慰ふございました。この世には何の

未練もございません。

男らしく死刑になります。

機會あれば自殺して見せます。

そして、

死刑囚は夜の獄窓に只獨りになると、烈しく

泣きぢやくつた。

神様！どうか生命をお救ひください。

神様！私は眞からの悪人ではございません。

ほんの行き心だつたんです。

——あゝ死にたくない！

死にたくない！



古風な人生

林田盛雄

ある女が古風な詩を書いた。

幹が生きてゐる限り、赤芽が
でるよ。

――妾の幹には大きな痕があ
る。

× ×
痕なんか忘れて了ふさ。

――妾の根元には吸ふだけの
慈養がない。

風通しのいい肥えた土地に移
植して貰ふさ。

× ×
自ら這ひ出せないし移植して
呉れる人はない

人生つてさう悲観したものだ
らうか。

――今日も食へない、明日も
食へないだつうに。

喰ふために、生命を投出すさ

――それは悪の華、毒の果汁
それもよからう。食ふために

どんな樹木だつて生きるを希
ふ生命だ。

ブルジョヤ社會では、獄窓に
も人間が生きてるぢやないか

ある漫畫

林田盛雄

雑誌が賣れて？

——やがて、賣れるでしやう。

お金がはいる？

——だんだん、よくなるでしやう

——いいお仕事がみつかりさうなの？

——今に、みつかるでしやう。

彼女氏は歸宅する僕に宜しく頼笑むんです。
僕は家近くになると微風にも心がゆれる。

やれやれ！

雀が草花の種をついばむでゐる。

さしづめ僕は、雀にならうか、花の種になるべきか。

まあいいや

雀の肌を荒らすシラミはどうだらう。

LITERATURE

秋日の感想

林田 盛雄

私は、草刈器を置きつ放しに
いた儘で、椰子の幹に背をもた
して、しばし想ふてゐました、
そして、舗道を歩く白婦人のス
ラリとした恰好の後姿にぼんや
りみいつてゐました、その婦人
の遠退く姿が、餘りにも、私の
すきな乙女に似過ぎてゐる、
私かながい間の沈黙から、自
分に歸つた時には、私の傍に老
人のストリートクリナが佇んで
ゐました
老人は、私と、向ふに去る白
婦人の後姿を等分に眺めて、私
と視線を合せると、ニヤ／＼と
微笑しました、で私もニヤ／＼
と苦笑しました
この老人のニヤ／＼微笑に、

私は呟いてやりました
お前だつて、若い日の思ひ出
が懐かしいだらうに、さう責め
るなよ、いや可愛想と思ふのか

野菜屋の小僧

菩提寺誠

苺の烟りスユにして亂るゝ薄

明りの嵐を

僕は歩いてゆく

明日の借金の言葉をつくろひ

管

いかにも無我になつて深夜の果
實をみかく

神様！この哀れな若者をあわれみ給へ

いつかそんな祈りもともしたものを

早春の雜草

菩提寺 誠

野榮屋の店頭を微笑して過
ぎるトランプをみて

○失業者にも春ださうな

不景氣！みる舎田町

○空家續くタンポポの花亂れ

夜の嵐、襖れ窓を脅か！ければ

○明朝のフレッドは？妻よ睡
らう

曉前から晩への働きに疲れ來
る日を重ねて

○曉の小石蹴つたぞかもめ
の啼

醉生夢死、その日の生業に茫
然として

○居睡りの哀の煙り妻の小唄
きく

一九三三、二、二七

微苦笑物語

林田 盛雄

玄關に小犬の糞が生々として
ある

父も、母も、友もなく育つ小
犬が庭に轉ひゐて

玄關に雀の糞が黠々とこぼれ
る

椿の芽を啄む雀がとびはねて
る

貧乏に慣れた男が扉の前に踞
むでゐる

どこかで焼き肉の匂ひがから
むでくる

細目をみひらてた男の心に今
日も又

引き越した荷物が山積みになつ
て表を通る

もう洗濯ものが乾いただらう
ああ、今も今

寢床で臨月の妻の腰が洩れる
「おなかのベビーが足をつん
ばつたよう」

今朝の感情

林田 盛雄

病める一葉の窓風が今朝はひげそりあとにしみる。

紫の志、紫の志。

紫のぬのを被つたひさしのつただ。

小夫の頭の上で行列するのは女のさるまたである。

あゝ、僕は貧乏になれた。

僕は病氣になれた。

僕は女になれた。

僕の心臓の鼓動は弱すぎる。

さて、僕の兩掌は顔を覆つて離れない

小夫のミルク、朝、書、夜の食事に

ポケットには前月の給料が七十八仙残つてゐる。

忘却の裡で

林田 盛雄

私は胸おどる歡樂を求めてゐた。

心からさう憶ふ一瞬を得たであらうか。

今は何もかも忘れやうとしてゐる。

私は烈しい勞動に身をさいなまれた。

心からそれを哀れみ憤つたであらうか。

今はその一瞬さへも忘れやうとしてゐる。

私は總てのことを體驗したと想ふことがある。

併し、時に、一切の感情をかなぐり棄て、新生の一瞬に甦り

さて人生はこれからだ、と呟くことがある。

さういふ勵みの言葉さへも、よはひ三十にして忘却の流れに
棄てるを希ふ日が來た。

朗か人生は、凡ゆる追憶の社會から俗心を脱却させることだ
私はとりとめのない人生の感情を破損する機械にして、修羅
しては使役し、修羅しては磨滅の淵まで人生を運んで來たや
うな氣がする。

素顔

林田盛雄

曉、鏡になる海がある。
宵、かがやきはたる満月がある。
春、實を結ぶ接吻がある。
秋、人の戸を待ち水蜜桃の熟れるあり。
僕はただ一瞬の呼吸の裡にさへ
香も、艶も、味もない人生の苦業を忘れ
て

喚びとともにつかみたい衝動がある

あゝ、僕の希ふ藝術は

はるか、はるか、かなたをひた走る
ポロ自動車（ポロ自動車）のろまにも似たるかな。

一九三四、九

人の子

雄盛田林

紫煙の香に酔ふ人の子よ
紫色の香に酔ふ人の子よ

セロリのツケモノばかり喰る小女あり
水ひきに煙に出し兩親を求めて
レタスのうねに夜露を浴びて泣き睡る
小兒あり

セロリは收穫される

レタスは收穫される

されど百姓の子は

明日もセロリのツケモノを喰べるだらう

レタスのうねに夜露を浴びて泣き睡るだらう

(一九三四、九)